文献探索サービス

一阪大中之島図書館の場合一

医学図書館 11(1) : 20~22, 1964

徳 村 泰 弘*

或る事項の調査あるいは研究に当っては、それに関する文献を調査することが先決であろう。

ところで最近における医学の著しい進歩は研究成果を記録する文献の量の増大と発行形式の複雑化をもたらしており、必要な文献を如何にして迅速、正確に検索し入手するかは研究者の大きな悩みとなっている。従って図書館が、文献の蒐集・保管だけでなく利用についても責任を持たねばならぬ以上、研究者に対して何らかの援助の手を差しのべる必要があるのはいうまでもない。

文献探索サービスは研究者に対する積極的な文献面の援助の一つである。現在のところこのサービスを実施している館は未だ少ないが、医学図書館のあり方を考える時、重要な問題であると思う。

阪大中之島図書館では、2年半ほど前からこのサービスを行なっている。なにぶんにも始めてから日が浅く、多くの困難な問題をかかえており決して満足すべき状態ではないが参考までにその実情を紹介し、皆様の御指導御批判を仰ぎたいと考えている。

1. 担当者

文献探索サービスだけのために、特別の係員はおいていない。文科系学部出身で図書館学を学んだ1名の参考係員(定員2名で1名欠員)が、レファレンス・サービスの一部としてこの仕事を担当している。

2. 対象

文献探索サービスは学内の教官、研究者に

限られる。学内者に制限しているのは、多くの時間と労力を要するこのサービスを、学外者にまでひろげるだけの人的余裕がないからである。又、たまに学生、インターンから申し出もあるが、原則として受け付けない。この場合、教育的な面から、探索法の指導、あるいは援助にとどめるべきであるのは当然であろう。

3. 内容

文献探索サービスと一口にいても、いろいろある。個々の依頼者の要求する事柄によって変わってくるからである。それらをいくつかのタイプに分けると、次のようになる。

a) 特定の主題に関する文献リストの作成

教員、研究者が、ある目的のために特定の主題に関する文献を調べたいが多忙のため自分で探す余裕のない時等、図書館に探索を依頼してくることがある。係員は求められた主題に関する文献を、索引誌、抄録誌、文献集等の書誌類や新しい雑誌のコンテンツ等によって調べ、文献リストを作成して依頼者に提供する。この種の依頼が最も多く、文献探索の中心をとっている。医学文献と医学の知識が要求されるので、与えられる主題によっては、医学を正規のコースで学んでいない係員には、重荷になることがある。

雑誌論文の探索を依頼されることが殆んどであるが、単行書を求められる場合もある。又、特定分野の雑誌のリストの作成を要求されることもある。

実例：雑誌論文一甲状腺の原発性繊維肉腫の剖検例。単行書一中毒に関するもの。

* Yasuhiro TOKUMURA

雑誌のリスト—内外の
精神神経学関係の雑誌。

b) 特定の個人の著作
リストの作成

前者程ではないが、この
種の依頼も多い。個人の経
歴、研究業績等を調べるた
めであろう。書誌類の人名
索引や人名辞書で解決でき
るので、むずかしいことは
ない。

実例：E. Werle の Ka-
llidin 及び Nicotine

関係の文献リスト。Hans Selye の著作
リスト。

c) 書誌的事項の確認

論文執筆に当って、掲載する参考文献ある
いは引用文献の書誌的事項がアイマイである
か、あるいは不完全であるため、その調査を
依頼してくる場合である。著者、出版年、雑
誌名又は図書名等の手がかりがあるので、書
誌類が完備していれば、容易に確認できる。

4. 文献探索依頼票と文献カード

a) 文献探索依頼票

依頼を受けるに当って、アイマイな了解は
無駄な時間と労力をもたらすので、絶対禁物
である。文献探索を能率的、効果的に行なう
鍵は、依頼者の欲している文献の範囲を十分
理解することである。そのために一定の様式
の依頼票が作っており、依頼者に必要事項を
記入してもらって、探索の際の資料にしてい
る。その項目は次の通り。

主題：できるだけ詳細に記入してもらう。

むずかしいと思われる問題には説明を乞
い、それに関連する専門用語をあげても
らう。

文献の種類：雑誌論文でよいのか、あるい
は単行本も含めるか等。

目的：レポート、論文、教科書等の執筆、

— 調査文献カード —			
著 者			
論文名			
掲載誌			
巻	号	ページ	発行年月
資 料： ☐ CA, ☐ CL, ☐ CZ, ☐ AJ, ☐ BA, ☐ EM, ☐ IM, ☐ QC, 医中, ☐ 化覧, ☐ 雑索, ☐ 新着			
抄 録： ☐ 指示, ☐ 報知, ☐ 無, ☐ 上の雑誌は図書館に ☐ ある。 ☐ ない。			
ノート：			
— 大阪大学中之島図書館 —			

新しい研究の準備、学会報告、患者の治
療法、症例報告等。

探索年代：戦後に発表された分、最近 2 年
間に発表された分等、必要とする探索年
代の範囲。

国語：日本語の文献だけでよいのか、それ
とも英語、独語も必要とするのか等の国
語の範囲。

受付年月日と完成予定日：完成予定日につ
いては、依頼者の文献リスト入手の緊急
度と係員の他の仕事の進行状態を考慮し
て、両者話し合いの上記入してもらう。
さもないと、文献リストが出来上った時
には依頼者がそれを必要としなくなる場
合もあり、両者共にマイナスになる。

依頼者氏名と連絡先(所属)：——

b) 文献カード(上図参照)

依頼票によって探索した個々の文献は、別
掲の文献カードに記録しておく。そして探索
が完了すると、そのカードのままの形で依頼
者に提供する。文献カードには必要な書誌的
事項は勿論、探索に使用した資料名のほか、
文献の入手を容易にするために、原著作ある
いは抄録の所蔵の有無までも明らかにされて
いる。

もし原著作、抄録とも当館で得られない場

合、ノート欄に総合目録によって調べた所蔵館を記入しておき、文献カードを渡す際、相互貸借によって必要な文献のコピーを入手できる旨を説明する。

5. 問題点

文献探索サービスが活発に行なわれるためには、それに対する図書館側の体制が整備されていることと教官、研究者側の理解が必要である。当館における文献探索サービスは、未だこの二つの条件が満たされておらず、充分行なわれているとは言い難い。

まず根本的な問題は担当者の数である。現在1名の参考係員は、このサービスのほかに参考質問の処理、参考資料の整備、相互貸借業務の一部を受け持っている。そのため文献探索にあてる時間と処理できる数というものは限られてくる。幸か不幸か、現在1ヶ月平均の文献探索依頼は3件であるが、決して満足すべき数字ではない。積極的なPRによって新しい利用者の開拓を考えてはいるものの現状ではたとえ依頼件数がふえたとしても、その分まで応ずることはできないだろう。そのためこの文献探索サービスを強く打ち出すことができず、ごく一部の利用者のためのものになっているような状態である。

第二に、担当者の医学分野の知識が問題になる。文献探索を正確に無駄なく行なうためには、索引誌、抄録誌、文献集等の書誌類に習熟していることは勿論、専門用語と広い医学の基礎知識が要求されるのは当然である。

或る主題に関する文献を探索するに当たってたとえ適切な二次資料と件名標目にアプローチし得たとしても、その標目の下にある多数の文献の中から必要なものを選び出す最後の判断は、正しい主題の知識による他はない。

論文名だけから簡単に選び出すことができることもあるが、文献の内容にまで立ち入らなければ判断しにくい場合が多い。

折角作りあげたリストも、必要な文献が見

落されていたり、主題と関係のない文献が集められていたならば、依頼者の図書館員に対する信頼は失われてしまうだろう。当館の文献探索サービスは、今のところ基礎造りの段階である。依頼件数の少ない現在では、依頼者が充分満足できる探索を行ない、その実績によって徐々に教官、研究者の信頼を得て行くことが大切だと思う。そのためには、医学を正規のコースで学んでいない担当者は、何らかの方法で文献探索に耐え得るだけの医学の知識を習得していかなければならない。担当者の自己学習だけでは不充分である。そこで当面の方法として、本年4月より医学部の講義に出席させてもらうことを考えている。

第三の問題は、教官、研究者側の文献探索サービスに対する認識である。前に述べたように、1ヶ月平均の文献探索依頼が3件にとどまっているという不振の原因には、教官、研究者側の図書館員の能力に対する不信、人にものを尋ねたり頼むことを恥と思う意識、文献探索サービスの存在を知らないこと等もあると思われる。文献探索サービスは、その依頼者が存在してはじめて始まる受動的なものである。従って教官、研究者が持っているこのような考え方を取り除くようにしなければならない。それには現在の文献探索サービスが質、量の両面において充分な実績をあげると共に、積極的なPRによって文献探索サービスを周知させることが必要である。

以上当館の文献探索サービスの概要と二、三の問題点を紹介してきた。当初は、正規の医学教育を受けていない図書館員によるこのサービスが、どの程度まで伸びるか疑問だったが、2年有余を経た現在では、充分とはいえないまでも一応軌道にのり、着実に前進しつつある。目下このサービスのために人員の補充と担当者への教育の強化を計画しており一層の充実、発展を期している。